

看護とは何か

—想像力を豊かにする読書のすすめ—

看護学部 講師 佐藤 美佳 (2017.7.12)

「看護」という文字は、手をかざしてよく見ながら、中のものを傷つけないように外からかばい守るという意味をもつ会意文字から成っています。人間が1人で生きていけるのなら、看護という言葉はもともと存在しなかったはずですが。看護は周囲の者たちが誕生に立ち会い、病床を護り、傷をかばい、死を看取るという人間の普遍的な営みを通して出来あがった、一つの大きな概念¹⁾といえます。近代看護教育の生みの親と言われているナイチンゲールは、著書『看護覚え書』の最終章の冒頭で、「この世の中には看護ほど無味乾燥どころかその正反対のもの、すなわち、自分自身は決して感じたことがない他人の感情のただ中へ自己を投入する能力をこれほど必要とする仕事はほかに存在しない」と述べています。そして「もしあなたがこの能力を全然もっていないのであれば、あなたは看護から身を退いたほうがよいであろう」と続けています。ナイチンゲールは、看護師としていかに専門知識があろうとも、その人の感情の中へ飛び込んで、その人のその時の想いを感じ取ろうと自己を投入する“この能力”がなければ看護師ではないと言っています。他の人間を理解し、その人の想いを感じ取れるような能力の一つは“感性”であると私は思っています。この“感性”を含めた能力を磨くために、何よりも想像力を豊かにし、自分自身の人生経験を積み重ねていくことが大切でしょう。

想像力を豊かにするためには、「とにかく本を読む」という行為を繰り返し、繰り返し、たくさんの量を読みましょう。読書は受動的に見えて、実は能動的なことなのです。本の中には、漫画や映像とは違い、活字だけの世界にも関わらず、人の人生が凝縮され人生を疑似体験できたり、様々な人の心の中に入り込んだような気持ちになれる楽しさや、ある時は辛さ、悲しさも体験できます。本を読むことで、想像力のモーターがフル回転して“感性”が磨かれると共に、情報や状況を把握し、客観的にアセスメントし意思決定するトレーニングにもなります。積極的に本を読み、想像力を豊かにしていきましょう。

【心に残った本】

- ① 「NOTES ON NURSING-BY FLORENCE NIGHTINGALE」(First Ed) フローレンス・ナイチンゲール、丸善プラネット、2017.
- ② 「看護覚え書 看護であること・看護でないこと」改訂新版 湯植ます等訳、現代社、1976.
- ③ 「ナイチンゲールは統計学者だった！—統計の人物と歴史の物語」丸山健夫、日科技連出版社2008.
- ④ 「月の満ち欠け」佐藤正午、岩波書店、2017.
- ⑤ 「醜い花」新装版 原田宗典・文、奥山民枝・絵、岩波書店、2008.
- ⑥ 「3.11を心に刻んで」「3.11を心に刻んで2013～2017」岩波書店編集部、岩波書店、2012～2017.

※②は当館に所蔵しております。(N110:N71) ④は後日納入予定です。

<引用文献>

- 1) 小川典子：看護って何だろう？ —ナイチンゲールの『看護覚え書』に学ぶ—、看護学生、4, 24-27, メヂカルフレンド社, 2001.